

太陽の輝き、星のない夜空

朝方、雨が渡つて行つた。雨音がホテルの部屋の中まで響いていたが、八時を過ぎるころには上がり、雲の立ち込めた空が徐々に明るさを増していだ。昼前には雲の切れ目から青空が広がるに違いない。

果実栽培に適した気候とは雨量が多く、しかも豊かな太陽の恩恵にあずかるこのあたりの天候をいう。

ぼくはバスでテラヘ向かう。バナナの積み出し港のある町で、ホンジュラス有数のリゾート地でもある。街を出てしばらく行くと、バナナを栽培している農園が道路の両側に広がつて來た。刺のついた針金が張り巡らされ、その内側に緑のバナナの木がおびただしく林立している。幕のような雲に遮られた淡い陽光の下を微風が渡り、雨に洗われたばかりのバナナの緑葉をかすかに揺すっている。植物の海原といつても過言ではない。

所々に細い土道が見える。農園の中に高圧電線の脚が据えられ、遙か遠くまで電線が延びている。民間機や軍用機、それにヘリコプターの接触事故を避けるために、赤い球状のものが電線の所々に取り付けてある。この目印は基地の町、コマヤグアでも目撃した。

道路がゆるやかな昇り坂に差しかかると、ぼくはバナナ園の大きさを改めて痛感した。緑の波がどこ

までも広がって、遠くの小高い丘の麓と重なっている。

バナナ園を抜けて間もなく行くと、バスのフロント硝子の前方に人々が群がっている光景が飛び込んで来た。群衆は道路の両端に群をなし、その一部は道路から外れて、草むらの中にまで降りている。

最初、集会でも開いているのかと思った。それから交通事故かも知れないと思った。バスの乗客たちも立ち上がり、窓際へ寄つて何が発生したのかを確認しようとする。バスが徐行しながら現場に接近したとき、草むらの中の人垣の切れ目から、うつ伏せになつた体が見えた。すでに死んでいるのか、後頭部と襟の後部が血にまみれ、もはや動かない。

「こんなことはよくあるのですか」

と、ぼくは隣の婦人に尋ねてみる。婦人は質問が聞こえなかつたかのように、しばらく無言でぼくの顔に視線を据えていたが、急に思い出したかのように、「珍しいことでもないですよ」と、不愛想にいった。

ぼくは七年前のエルサルバルを思い出していた。目前の光景が当時の再現かのように、そのときもやはり、赤く血に染まつた路面にうつぶした一つの死体を、バスの窓から目撃したのであった。男の死体だった。側に女が蹲つて泣いていた。怒りで顔を曇らせた人々が遺体を取り囲んでいた。殺されたのは農民らしく、辺りに収穫したばかりと思われるトウモロコシが散乱していた。

る。椰子の木に似て、大きな葉を笠のように空に向かって広げている。バスがアフリカ楓の鬱蒼とした林を進むとき、ぼくは樹木の整然とした配列に労働の跡を見た。米国資本がカリブ海沿岸に次々と農場を開拓するにつれて、ベリーズやジャマイカから黒人たちが農園労働者として移住して來たのであった。前方からカーキ色の軍用トラックがやって来でそれ違つた。幌を張つた荷台の上に兵士たちが乗つてゐる。農場を警備する」とはエルサルバドルやグアテマラでも軍の重要な任務で、農場警備隊 (Guardia de hacienda) と呼ばれる農場専門の部隊が存在している。

昼前にテラに到着した。ぼくは安いホテルを探して荷物を置いてから浜へ出てみた。きめの細かい白い砂の海岸が、ゆるやかな弧を描いて遠くまで延びている。青い海水を湛えた海が広がり、太陽に光る波の間で水着姿の人々が戯れている。

こんな光景は世界中どこの海へ行つても目撃できる。海が織りなす美観に後進国と先進国の区別はない。だから、海を眺めていると、自分が第三世界の貧困の中を旅してることを忘れてしまうことがある。そんな時ぼくは海岸沿に群がっている建物が高級ホテルではなくて、貧しい人々の住居であることに気づき、われにかえつたりする。

浜辺の近くにある一軒の家にぼくは視線を向ける。木製の大きなくず箱を、椰子の木の下に転がしたような印象がある。高波のときに浸水を防ぐために、床上げの工夫が施してある。トタンの屋根はすっかり錆びて茶色に変色し、風で吹き飛ばないように石が置いてある。鶏が数羽、砂とこみの交じりあつた地面で、しきりに嘴を上下させて餌を啄んでいる。

貨物船が一隻沖合に停泊し、突堤は海中に長々と延びている。海岸づたいに砂浜を歩いて港までたど

り着くと、ぼくは突堤の上に立った。荒波が突堤の脚に打ち寄せては砕ける。風に乗って海鳥たちが舞っている。おびただしいカリブ海の陽光にもかかわらず、足下の海が真っ黒に濁って見えた。波が鋭利なナイフのよう光る。中米のどこかの国で民衆の蜂起が発生すれば、ただちに海の彼方からアメリカ海兵隊の軍艦が近づいて来てこの浜辺に兵士が上陸し、すでに基地に駐留している部隊と合同作戦を開するに違いない。

塩の香を孕んだ風が髪の毛をかきあげた。ぼくは突堤の先端まで真っすぐに延びている貨物の線路を、ぼんやりと眺める。線路は午後の光を反射して、鈍く光っている。安い賃金で収穫された作物や工場で加工された製品が、コンテナでこの突堤まで運ばれ、海外行きの船に積み込まれて行く。先進国の繁栄と第三世界の悲劇が共存している。

ぼくはつい数時間前に、バスの窓から眺めた巨大なバナナ園の光景を思い出した。首都の裏町で、病氣の子供をかかえて乞食をしていた夫婦も、この地方のバナナ園で働いていたような気がした。すると今度は、貧困と対極をなす人々の豪華な生活が思われた。

バナナ園の米国人経営者は、プール付きの大邸宅に住んでいるような気がする。高層ビルの中にある事務所では、ハーバードなど一流のビジネス・スクールを卒業した従業員を従え、コンピューターを使用して綿密にバナナの栽培計画や貨物船のスケジュールなどを作成する。日曜日には家族と共に教会へ足を運び社交に努める。政治家へのさまざま働きかけも忘れない。そして、年齢と共に社会的な地位と名誉を不動のものにして行く。先進国の多くの青年が夢見る人生の出世コースである。